膵頭部癌の大動脈周囲リンパ節転移に関する臨床的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/14871

学位授与番号	医博甲第984号
学位授与年月日	平成3年3月31日
氏　　名	小林弘信
学位論文題目	膵頭部癌の大動脈周囲リンパ節転移に関する臨床的研究
論文審査委員	主査　教授　宮崎逸夫
	副査　教授　久田欣一
	教授　磨伊正義

内容の要旨および審査の結果の要旨

膵頭部癌のNo.16大動脈周囲リンパ節の転移経路を追求するために，同部までのリンパ節郭清が行われた膵頭部癌切除42例のリンパ節転移状況を検討し，さらにCH44あるいは^{111}In colloidを用いた膵実質内注入による膵リンパ流の検討を膵頭部領域癌それぞれ10例，7例に施行し，以下の知見を得た。

1）各リンパ節転移をみるとNo.13が69.0%ともっとも高率であった。No.16転移については7例，16.7%にみられた。No.16を除くリンパ節転移例のうちNo.16転移も同時に認めた症例の占める比率ではNo.14が高率（43.8%）であった。

2）No.16転移例では単独転移例を認めず全例No.14転移を認め，No.14とNo.16の強い関連性を示した。このことより順行性転移の立場に立脚すると膵頭部よりNo.16への主転移経路はNo.13→No.14→No.16と考えられた。しかし，膵頭部癌検索例ではNo.13を介さない経路，CH44の検討ではNo.14を介さない経路、^{111}In colloidの検討ではNo.13，No.14を介さない経路も推定された。

3）No.14内経路についてのCH44の検討では14bに最も多く77.8%移行するものの，臨床上は14a，c，dへの単独転移例も認め，No.14内では複雑な経路を辿るものと推定された。

4）No.16転移を来しやすい癌腫の組織学的所見は，rpe，i，ly陽性，INF β，γ例および間質結合織の多寡では中間型，硬性型であった。

腫瘍径については一定の傾向を認めなかった。

5）No.16内でのひろがりをCH44および^{111}In colloidの検討でみると，まずNo.16b 2，Interに移行し順次ひろがるが，腹側方向から背側方向へのひろがりが平面方向のひろがりに優先し，No.16内移行早期ではInter，r−RA（Renal Artery）下に40.0〜57.1%，さらにAor−latero，l−RA下にも25.0〜28.6%の移行を認めた。

以上より，膵頭部癌の根治的切除をめざすためにはNo.14,16を含む広範囲郭清が重要な要素となり，No.16の郭清に関してはAorta左側も含み広範囲に，とくに深さでは両側腎動脈より深部レベルまで行う必要があると思われた。

本研究は，膵頭部癌の根治手術の重要な因子であるリンパ節郭清のあり方に重要な指針を与える膵臓外科学に寄与する労作と認められた。